

OTSUKI
Community
Workers
Report 2016



プラ板ワークショップの準備作業。
2017年3月6日、岩田邸にて。みんな
でつくった机と座布団が活躍している。

みんなに愛される 場所をつくりたい

岩田邸プロジェクト



林 厚志 はやしあつし
映像制作プロデューサー、
農村振興に関わるNPO団
体などの経験を経て、富山
県から協力隊として移住。

Hayashi Atsushi

子

どもたちがお絵かきをしたりお昼寝をしたり。その傍ら、お母さんたちがおしゃべりしながら熱心に手を動かしている。つくっているのは、プラ板のネームプレート。この日「岩田邸」では、2週間後に予定しているプラ板ワークショップに向けた準備がおこなわれていた。

「岩田邸」とは、大月駅から市役所へ向かう国道20号の裏通り、旧甲州街道の本筋でもある「平和通り」に面し、元々織物問屋として使われていた建物である。通りにはシャッターがしまる店舗も目立つなか、黒板とコルクボードが貼られた入口が目玉。この岩田邸を借り受け、人が集まる場づくりを模索しているのは、地域おこし協力隊の林厚志さん。年々増加している外国人観光客を対象に宿泊施設をつくりたいと考え、活用できる空き家を探していたところ、岩田邸と出会った。

岩田邸は昭和34年に建てられ、「防災建築」と呼ばれる珍しい造りをしている。外から見ると隣りの建物と一体となっている。中に入ると、鉄筋建築物特有のひんやりした涼しさと暗さを感じられる。窓枠などが鉄製で、極力木材を使用しない造りになっている。磨かれた床やタイル張りの洗面台など、随所に昭和のレトロな趣が感じられる。

昭和34年といえば、このあたりに一番活気があった時代。夏には七夕祭りが行われ、通りは人で賑わった。そんな、まちの最盛期に生まれ、賑やかなまちの記憶を有する建物が、時代が変わった今も残っている。かつてのように、この場所が、さまざまな人が行き交う交差点のような場になれば、と林隊員は思っている。

2016年7月、有志によって掃除が行われ、照明や家具などを周囲から寄付してもらい、岩田邸の新しい場づくりが始まった。照明を変えただけでも、通りがかった人から「雰囲気がよくなったね」「きれいになったね」と声がかかるという。宿泊施設にするには、まだまだ改修や法的な面に対する整備が必要で、課題はたくさんあるが、なによりまず、この場所が「みんなに愛される場所」になってほしい」と林隊員。本を読んだ

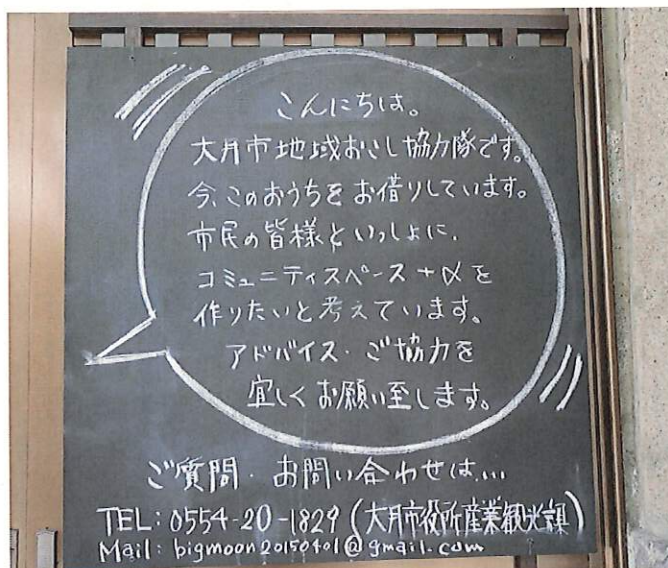


岩田邸のリノベーションについて一級建築士の平井進さんに相談。「林さんは外から客観的に見て自由な立場で大月について意見を言うってくれる、貴重な存在」と平井さん。岩田邸は「建築的に面白いと思います。躯体の力強さを見せられれば良い」。

り、休憩したり、情報交換したり。地元の人や、登山客や、外国人や、いろんな人が思いおもいに過ごせる場所になればいい」。最終的には、岩田邸を空き家活用の新しいモデルとして確立し、中心市街地に良い影響を与えられるようになりたい。

まずは地元の人に関心を持ってもらおうと、岩田邸を会場にワークショップなどを企画してきた。12月にはテーブルづくり、1月には郡内の織物を使った座布団づくりワークショップを開催し、岩田邸で使うものをみんなで作った。地元だけでなく、市内外から参加があった。今後もさまざまな企画を予定している。

岩田邸活用プロジェクトは現在、地域の有志による自主的な取り組みとして展開し始めている。あくまでも地域活性化の取り組み主体は地元の人。裏方で、それをサポートするのが協力隊の役目。協力隊がいなくなれば担い手がいなくなってしまうのでは意味が無い。「自分がいなくても持続可能な体制にしていきたい」。



▲市制 50 周年企画で収集された、昔の大月の写真。郷土資料館で眠っていたパネルを借り受け、展示している。2016 年 8 月のかがり火祭りに合わせ展示会を開催した。

◀座布団づくりワークショップにて (2017.1)。市内の藤本ふとん店に講師を依頼した。

Hayashi Atsushi



スタンドを制作している沢井工務店の小俣潤さん。林隊員から飛び込みで依頼を受けたのをきっかけに、制作を引き受けて来た。「新しいものをつくるのが好き」「乗りかかった舟だから」。大月らしさをだそうと、市章をモチーフにしたデザインを考案した。(写真：スタンドの足部分。手前は試作品)

点と点をむすぶ

自転車スタンドプロジェクト



猿橋に設置されたスタンド。自転車のサドル部分をバーにひっかけて使用する。ほかに、イオン大月店、笹一酒造、桂川ウェルネスパーク、アマヤドリカフェ、レストランニューあかいけ（精進湖）などに設置している。

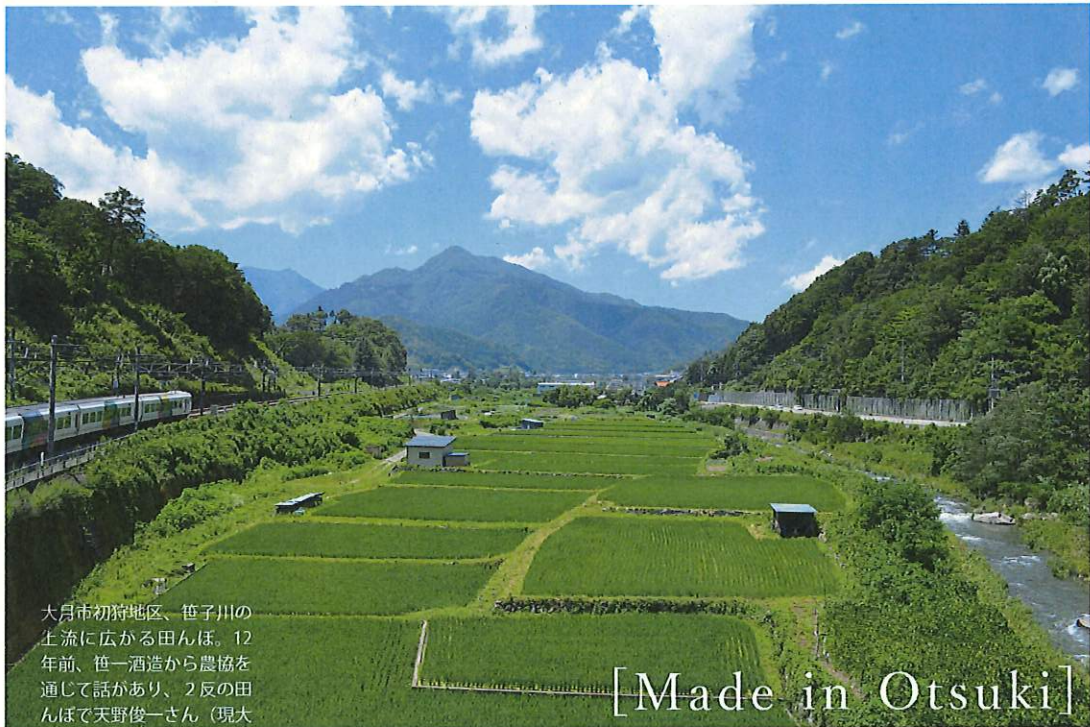
大月を、通り過ぎるまちではなく、立ち寄れるまちにしたい。そんな思いで林隊員が発案し、市内の工務店と共同で取り組んでいるのが、木製自転車スタンドプロジェクト。

市内を横切る国道20号は、車だけでなく、自転車の通行量も多い。自転車客に注目し、自転車を駐輪できるスタンドを設けることで、市内に気軽に立ち寄れるスポットを増やすことを目指している。

ロードバイクやマウンテンバイクといったスポーツ自転車は、スタンドが付属しておらず、駐輪の際は、壁に立てかけたり床に倒したりしなければならぬ。自転車スタンドが設置できれば、簡単に駐輪することが出来る。

スタンドの素材には県産材のヒノキを使用。ヒノキは柔らかく、自転車を傷つけにくい。また、林業の活性化の一助になれば、との思いが込められている。

2016年3月に設置を開始し、デザインなど改良を加えてきた。現在、市内外に10台ほどを設置。今後は、スタンド設置状況のPR等を検討し、持続的な取り組みにしていきたいと考えている。



大月市初狩地区、笹子川の
生流に広がる田んぼ。12
年前、笹一酒造から農協を
通じて話があり、2反の田
んぼで天野俊一さん（現大
月市酒米生産組合会長）が
1人で酒米を作り始めた。
品種は標高の高い大月に適
した「夢山水」。「ふつうの
米より値段がいい。地域限
定のブランド米にし、ま
ちが活性化できればいい」
との思いで始めた。今で
は、生産者は5人に増えた。
「（お酒は）自慢できるもの
の一つになった。お土産と
して自信を持って持ってい
けるようになった」と天野
さん。笹一酒造の鈴木昌弘
さんは「大月は遊休農地が
たくさんある。夢山水をつ
くってもらい、それを買
い取ることで、地域活性に
企業として出来ることをし
ていきたい」。

[Made in Otsuki]

をつくる

「つきたん」「私のお酒」酒米・日本酒づくり体験プログラム

岩田邸のテーブルの上には「つき
たん」が並ぶ。林隊員がスタッフ
としてプログラムに参加し、地域
のガイドや進行役を務めてきた。
「大月のDNAを色濃く商品として
反映しているプロジェクト」「お
酒はいろんな意味でハブになれる
ツール」と林隊員。佐藤教授は「林
さんのようにコーディネーターと
してあいだに立つ人が必要。ビジ
ネスとして手応えを感じてもらえ
れば、これをベースにガンガンやっ
ていってほしい」。



「酒米・日本酒づくり体験
プログラム」は、大月
短大の学生と一般の参加者を対象
とした、二つのゴールを設定した
プロジェクトである。

大月産の酒米「夢山水」を地元
酒蔵「笹一酒造」で醸造し、大月
短大オリジナルの日本酒「つき
たん」として販売。酒米の田植えや
収穫、お酒のラベルづくり、販売
などの体験を通じて、学生は商品
化のプロセスについて学ぶ。

一方、スタートして3年目を迎
えた2016年度は、一般参加者
も公募し、酒づくり体験を通じた
通年型の地域観光の可能性を探
った。体験した参加者からは「また
やりたい」などの感想が寄せられ
好評を得た。主催する大月短大の
佐藤茂幸教授は、「つきたん飲ん
だよ」という声も聞くようになっ
た。市内での認知度も高まって来
ている」と手応えを感じている。

酒米の生産者からは、他の農産
物の販売や、他の地域資源と結び
つけた観光モデルにつなげてい
きたいとの期待も寄せられている。
今後さらにプロジェクトを拡充・
展開していくための体制づくりを
模索している。

Suzuki Ryohei

浮世絵の世界へ

猿橋遊水舎



鈴木 涼平 すずきりょうへい
アウトドア事業などの経験を経て、協力隊として東京都から移住。団体自転車競技での優勝経験もあり

「浮世絵の世界へ」――。

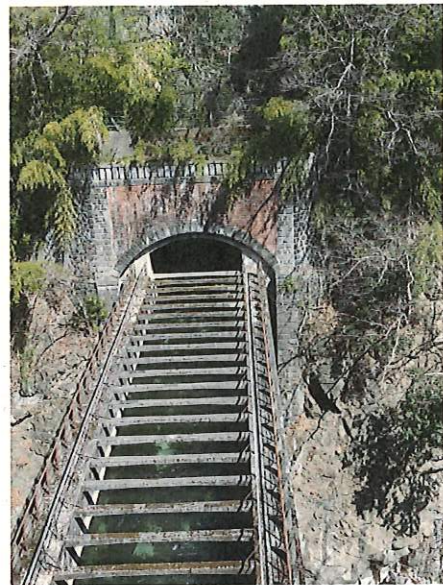
歌川広重の描いた「甲陽猿橋之図」。上空に橋が架かる深い渓谷からの眺めが描かれている。舞台となっているのが、日本三奇橋のひとつに数えられる、大月市猿橋地区、桂川に架かる猿橋である。

猿橋地区は昔は宿場町であり、花柳街としても栄え、賑わっていた。当時は屋形船があり、川から橋を眺めることも出来た。

時代は変わり、今では桂川に入ることなどない。「名勝猿橋」として今も観光客を迎え入れるが、屋形船はなく、川から橋を見上げる機会はない。地元の人でも、川に入った記憶があるのは、子どもの頃に川遊びをしたくらいだ。

そんな猿橋で、「かつての眺めをもう一度」と、猿橋の下でボートの運航を始めたのが、地域おこし協力隊の鈴木涼平さん。

鈴木隊員は元々、青梅でラフティングガイドの仕事をしており、もっと立地の良いところはないか探していた。そんな折、大月市で協力隊の募集があり、応募。桂川でラフティング(※)を業としてやりたい、と思い大月に来た。



八ツ沢発電所第一号水路橋



猿橋の入口にあるアーチ



猿橋の駐車場に設置してある猿の像



猿橋にある稲荷大明神

Suzuki Ryohei

「ラフティングの魅力は、自然の中のスリル。ジェットコースターとは違うスリルが味わえる。落ちそうになったり、しぶきを浴びたり。身体中の五感を刺激する」。

2015年11月〜2016年3月。まずは市役所職員や地元住民を対象にボートに試乗してもらった。最初は「そんなことできるの？」と半信半疑で見ていた地元住民も、実際にボートに乗ってみることで、理解が広がり、応援してくれるようになった。

「もう一度乗りたいという人が多かった」。そう話すのは、猿橋で理容室を営み、区長を務める藤田邦芳さん。理容室の店内にはボートのポスターがあちこちに貼ってある。藤田さんはこれまでに3回乗ったが、一度乗るとまた乗りたいくなる。新緑、紅葉、雪景色——季節によって見られる景色が違うのが魅力だ。試乗した住民の口コミで、県内外のあちこちから乗りたいという人が来たそうだ。

そんな中、市長と大月出身の落語家・「笑点」でおなじみの三遊亭小遊三さんが試乗し、活動に対する行政や地元住民の理解が一気に深まった。さらにテレビや新聞

等メディアで紹介されたのをきっかけに、遠方からもお客が訪れるようになった。

2016年の5月、協力者と共に「猿橋遊水舎」を立ち上げ、土日祝日に運航を開始した。

インターネットで予約を受け付けているが、通りがかって立ち寄る登山客や観光客なども多い。多いときは1日に数百人のお客さんが来て、さばききれないこともあったとか。

鈴木隊員が猿橋のまちを歩くと、通りすがりのお店の人から次々に声がかかる。「みんな応援している」と藤田さん。「涼平くんは言うときすぐ動いてくれる。行動が早い。いろんなアイデアも持っている」。たとえば、岸で売店をやったらどうだろうか、人力車があれば絵になるんじゃないか……。まちの人との会話からも、次々とアイデアが生まれてくる。

冬場は休業していたが、来年度は4月から運航を開始する予定。土日だけでなく、平日も毎日運航する。運航状況は猿橋遊水舎のホームページから確認できる。

※ラフティングとは：ゴムボートを使っておこなう川下り



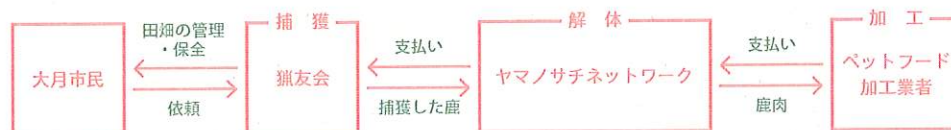
猿橋住民の方々と。名勝猿橋



協力者の杉田優子さんと打ち合わせ。杉田さんは犬用の服（ドッグウェア）を作る仕事をしている。鈴木隊員と同時期に真木地区へ移住してきた。鈴木隊員の獲った鹿を「猟師涼平の鹿肉！」と名付け、販売を手伝う。鈴木隊員にとって「マネージャーのような存在」。お客さんを紹介したり、鹿肉でジャーキーを試作して犬の反応を研究したり。「もちつもたれつ、相乗効果でやっていきたい」と杉田さん。

山の恵みを活かす

ヤマノサチネットワーク



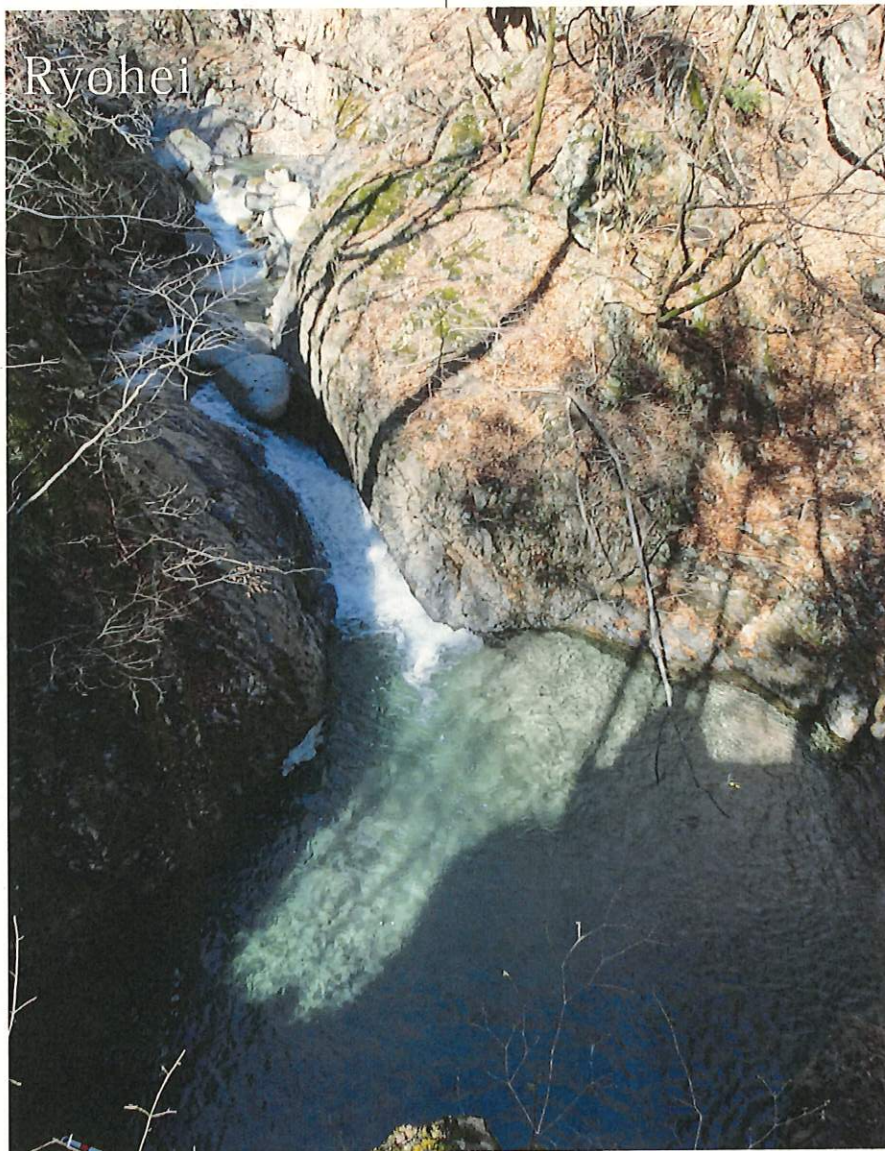
鈴木 木隊員のもう一つのメインの活動は、鳥獣被害対策を推進するための、鹿の買い取りと販売である。市内では、畑を荒らされたり植木を食べられたりなど、鹿と猪による獣害が深刻な問題になっている。捕獲に対し補助金が支給されるが上限があり、それ以上の捕獲を促すしくみがない。

そこで、猟師個人から直接鹿を買い取ることによって捕獲意欲を促進。買い取った鹿肉はペットフードの食材として飼主に向けて販売する。鹿は捕獲しても埋めて処分するしかなく、猟師も困っているのが現状。ペットフードにすることで無駄なく活かすことができる。

猟師から連絡を受けて駆けつける、鹿を解体するスタッフの育成や、作業場を整備し、体制づくりを進めて来た。2017年1月、「ヤマノサチネットワーク」として、ペットフード用生肉を販売するための仕組みが出来上がった。

自らも猟師であり、動物が好きな鈴木隊員。鹿肉を食べて犬が喜ぶ姿を見ることが出来るのが、やりがいになっている。「誰もマイナスにならない仕組み。モデルとして全国に広めたい」。

Suzuki Ryohei



全国のモデルになりたい

アウトドア事業

ほ かに、鈴木隊員が企画しているのが、沢登り(※1)等のアウトドアの拠点づくりだ。

かねてから、市内で沢登りが出来るエリアがないか、探していた。水がきれいで、広葉樹が多く、滝や大きな岩がある、真木の上流に目をつけ、検討を重ねて来た。2017年夏からの試行を目指している。

近隣には宿泊施設があり、使われてない広場もある。宿泊施設と連携し、そこを拠点としたアウトドア事業の展開が出来ないか考えている。広場が使えれば、「パンプロトラック」(※2)の遊び場になる。また、沢登りは人間だけでなく、ペットも一緒に楽しめるものに出来ないか。沢登りのガイドは帝京科学大学の学生に依頼し、自然観察をしながら楽しめるようにしたい。この夏の試行開始に向け、さまざまなアイデアを練っている。

鈴木隊員が目指しているのは、全国へのモデル展開だ。大月をフィールドとしてアウトドア事業のモデルを確立し、それを全国に広めたい。フィールドは大月、見据えているのは全国である。

※1 沢登りとは：渓谷を下流から上流に探検すること

※2 パンプトラックとは：盛り土をいくつもつなげ、自転車の周回コースにすること

大月市
地域おこし協力隊
活動報告書
2016

地域おこし協力隊とは

2009年度から開始された総務省による制度。都市部から、人口減少や高齢化が進む地域に住民票を移動し生活の拠点を移した者を、地方自治体が「地域おこし協力隊」として委嘱。任期は最長3年間。隊員は地域おこしに関わる活動を行いながら、その地域への定住を目指す。